

# ダニエルの書 - 第百六十四号

ダニエル書11章の預言的意義：歴史のおよび将来的な含意の解明

Jeff Pippenger

2024-03-28

ダニエル書十一章十六節には、紀元前63年におけるポンペイウスによるユダとエルサレムの征服が示されている。それは、同章四十一節の成就として、合衆国に間もなく到来する日曜休業令を表している。この節に関連する歴史は、その都が攻略される時に内戦が進行していることを示しており、それによって、いま合衆国において進行しているアメリカ南北戦争の反復が示されている。実際に発砲が行われたか否かにかかわらず、いまや二つの階級が合衆国の支配をめぐる闘争している。ポンペイウスがエルサレムを征服した時、それは、エルサレムが西暦70年に滅ぼされるまでローマの支配下にとどまることを示していた。それゆえ、それは、聖書預言の第六の王国の終わりを画する、間もなく到来する日曜休業令の予型であった。

ポンペイウスは、この節において特定されている四つのローマ勢力の最初のものである。ローマ人であったマルクス・アントニウスもまた特定されているが、ローマの指導者として表象されている四つの勢力のうち、アントニウスは、ローマに反逆し、ローマに敵対してエジプトと同盟を結成したローマの指導権を表している。ポンペイウス、ユリウス・カエサル、アウグストゥス・カエサル、およびティベリウス・カエサルは、地の獣の共和政の角における四世代を表すために、預言的に用いられている四人のローマ人である。

1863年の世代における米国南北戦争の反逆を表すポンペイは、最後の世代と、今まさに進行中の現在の「内戦」をも例証している。ユリウス・カエサルは第二の世代を表している。すなわち、合衆国が諸国の中で第一の国家として確固として樹立された時代であるが、1913年に暗殺されたのであり、その時、金融制度の主権はグローバリスト銀行制度に渡され、一つの世界政府に向けた働きが始まった。アウグストゥス・カエサルは、二度の世界大戦における栄光の年月を表している。その流血にもかかわらず、その時代に合衆国は世界の羨望の的となったのである。次いで最後の世代において、酒癖の悪さとキリストの磔刑で知られるティベリウス・カエサルは、本質的には最初のカトリック教徒の大統領ジョン・F・ケネディの選出によって始まった時期を表しており、それによってローマにひれ伏す世代が示されている。

ポンペイウスに関するこれらの預言的な問題は重要だが、現在私たちが焦点を当てているのは、ポンペイウスと第16節に先行する預言的歴史であり、その歴史は章の最初の二節で1989年を終わりの時として示すことから始まり、さらにグローバリストたちを煽るレーガン以来6人目の裕福な大統領を指し示しており、それはトランプがまさにそれを成し遂げたとおりである。

トランプは、キュロスに続く第四の統治者である富裕なペルシアの王、クセルクセス（エステル記ではアハシュエロスとしても知られる）になぞらえられている。これらの節で

は、3節で、クセルクセスに続く次の王はアレクサンドロス大王とされている。歴史的には、クセルクセスとアレクサンドロス大王の間には八人の統治者がいた。トランプから、アレクサンドロス大王によって表される世界統一政府に至るまで、十人の王が示されており、トランプが最初でアレクサンドロスが最後である。

預言の系統は、世の終わりに地のすべての王たちが教皇制と姦淫を行うこと、そしてそれらの王たちが「十人の王」として表されていることを示している。十重の王国の頭であり、イゼベルを妻としていたアハブは、十人の王すべてが教皇制と姦淫を行うとしても、まず最初にそれを行う一人の主要な王が存在するという事実を表している。教皇制が最初に地の王座を与えられた時、その主要な王は、西暦496年のフランク人（フランス）の王クローヴィスであった。これは、教皇制がフランスに対して、カトリック教会の長子、またカトリック教会の最年長の娘という称号を与えていることと一致している。

文明世界の王座にローマを据えたフランスの預言的な働きは、アメリカ合衆国の預言的な働きを象徴している。聖書の預言における日曜法はアメリカ合衆国で始まり、その後、地上のあらゆる国がその例に倣う。預言の一行一行を積み重ねていくと、終わりの日に真っ先に罪の人と姦淫を犯す十人の王の筆頭の王がアメリカ合衆国であることが明らかになる。2節と3節では、最初の富める王クセルクセスと最後の王アレクサンドロス大王の間には王が示されていないが、歴史は十人の王を示している。十という数は試みを表し、また連合も表す。

世界が直面している試練は、獣の像として表される世界的な体制を打ち立てることにある。その試練は、間もなく施行される日曜法においてアメリカ合衆国で始まり、地球上のすべての国がその例に倣うときに終わる。イエスは常に、物事の終わりをその始まりをもって例証するので、二節と三節で富める王とアレクサンダーの間に王の名が挙げられていなくても、歴史は、最も裕福な大統領から始まる試練の過程を示している。その大統領が富んでいたのは、墮落した政治体制に加担して富を生み出したからではなく、事業上の取り組みによってである。

アメリカという名称は、「アメリゴ」という名のラテン語形に由来し、この「アメリゴ」はイタリアの探検家アメリゴ・ヴェスプッチの名である。ヴェスプッチは、15世紀末から16世紀初頭にかけて新大陸へ幾度も航海した探検家・航海者であった。総じて、ヴェスプッチの探検は、新大陸の探索における利益・拡張・名声の可能性を見込んだスポンサーや後援者による財政的支援や資本投資によって可能となった。「アメリカ」という名称は、利益を生み出すための取り組みの象徴である。

イエスは常に、ある事柄の終わりをその初めとともに示されるのであり、メド・ペルシアの二本の角を持つ王国から、アレクサンドロス大王によって表象される一つの世界政府へと至る橋を表す十人の王の初めは、富める王から始まる。この王は、フランスとアハブによって予表される王国の大統領であり、また、全世界が合衆国の力に伴う経済によって直面させられ、売り買いをすることができることを望むならカトリック教会にひれ伏すよう全世界を強いるその時、アレクサンドロス大王によって表される頭ともなるのである。

ヨハネの黙示録17章における第七の王国は十人の王であり、彼らの預言的特徴の一つは、彼らが「短い時」しか続かず、その後、その第七の王国をバビロンの大淫婦に与えることに同意するという点である。しかも、その合意によって成り立つ支配は「一時」しか持ちこたえない。彼らはその合意を受け入れる預言的理由は、彼らがバビロンのぶどう酒に酔っているからである。歴史的に見ると、アレクサンドロス大王は短い時しか支配せず、酒に溺れて命を落としたため、王国が打ち立てられるのと同じくらい速くその生涯を終えた。これは、国際連合の十人の王たちの「短い時」と「酔い」を象徴している。アレクサンドロス大王は立ち上がるやいなや砕かれ、その王国は四方の風に分け与えられ、彼の旧王国を再建しようとするその後の闘争を示している。

また、メディア人ダリウスの第一年に、私自身が、彼を支え、強めるために立った。いま、あなたに真理を示そう。見よ、ペルシアにはなお三人の王が起こり、第四の者は彼らすべてよりはるかに富むようになる。彼はその富による力をもって、すべての者をギリシアの王国に対して奮い立たせる。そして一人の大いなる王が立ち上がり、大いなる支配をもって治め、思うがままに行う。だが彼が立つやいなや、その王国は打ち砕かれ、天の四方に向かって分けられ、しかもそれは彼の子孫にではなく、彼が治めた権勢に応じてでもない。というのも、その王国は根こそぎにされ、彼ら以外の他の者たちのものとなるからである。ダニエル書 11:1-4.

アレクサンドロスの王国は、終末の時代を表しており、その時代には預言が急速に成就するとされているため、成立したのと同じくらいの速さで崩壊した。

「悪の勢力は力を結集し、結束を固めつつある。彼らは最後の大きい危機に備えて力を強めている。私たちの世界では間もなく大きな変化が起こり、最後の動きは急速なものとなるだろう。」『証言』第9巻、11.

イスラムの第三の災いは、第一および第二の災いの預言的特質の上に確立されている。第一の災いには、ムハンマドの到来をもって始まり、次の期間に至るまで続く一つの期間があったが、その次の期間は「五か月」すなわち百五十年と特定されており、その間にイスラムはローマの軍勢を「害する」のである。百五十年の時の預言の終わりは、同時に、三百九十一年十五日の預言の始まりを画するのであり、その期間において、第二の災いのイスラムは、それからローマの軍勢を「殺す」のである。

2001年9月11日は、第一の災いのムハンマドによって表象される期間の到来を画したのであり、その期間には、2023年10月7日が、イスラムが古代の文字どおりの「栄えある地」において——それはアメリカ合衆国の代理的表象である——「ローマの軍勢」を「害する」期間の始まりを示すものとして含まれている。そして2023年10月7日以来、ローマの軍勢に対するイスラムの攻撃は、2024年2月17日の本稿執筆時点で二百件に迫っている。

間もなく到来する日曜法において、アメリカ合衆国は聖書の預言における第六の王国として「殺される」。これは、彼らの第三の大ジハードの戦いが激化する中で、391年と15日にわたるイスラムの攻撃によってローマの旧軍勢が滅ぼされたことに呼応している。ミカエルが立ち上がると、人間の猶予期間は閉じられ、七つの最後の災いの間に四つの風が完全に解き放たれる。

私は、諸国民の怒り、神の御怒り、そして死者を裁く時が、それぞれ別個のものであり、順を追って起こること、またミカエルはまだ立ち上がっておらず、いまだかつてなかったような艱難の時もまだ始まっていないことを見た。今、諸国民は怒りを募らせている。しかし、私たちの大祭司が聖所での働きを終えられるとき、彼は立ち上がり、復讐の衣をまとわれ、その後に最後の七つの災いが注ぎ出される。

「私は、四人の天使がイエスの働きが聖所で終わるまで四つの風を押さえており、その後、最後の七つの災いが来るのを見た。」『初期の著作』 36.

「四つの風」は、シスター・ホワイトによって「激しく怒った馬であって、手綱を振りほどいて進む道に死と破壊をもたらそうとするもの」として表されており、恩恵期間が終わる時に完全に解き放たれる。第二の災いにおいて、それらは「四つの風」としてではなく、「四人の御使い」として解き放たれるものとして描かれていた。

ラッパを持つ第六の御使いに言った。「大いなるユーフラテス川に縛られている四人の御使いを解き放て。」そして、その四人の御使いは解き放たれた。彼らは、人間の三分の一を殺すために、その時、その日、その月、その年のために備えられていた。黙示録 9:14、15

「四つの風」や「四人の天使」は、どちらも、その象徴が用いられる文脈によってイスラムを表す記号である。アレクサンドロス大王が立ち上がったとき、彼の王国は第七の王国を表しており、すなわち竜と獣と偽預言者の三重の王国の三分の一である。「彼が立ち上がる時、その王国は打ち砕かれ、天の四方へと分けられる。」人類に対する猶予期間が終わると、四つの風、すなわち四人の天使が解き放たれ、彼らは彼の王国を打ち砕く。なぜなら、その王国は「打ち砕かれる」からである。そのとき十人の王たちとその協力者であるグローバリストの商人たちは、遠く離れて立ち、嘆き叫ぶだろう。

見よ、王たちは集まり、ともに過ぎ去った。彼らはこれを見て驚き、おののき、あわてて逃げ去った。そこで恐れが彼らを捕らえ、産婦の苦しみのような痛みが襲った。あなたは東風をもってタルシシュの船を砕かれる。詩篇 48:4-7

十人の王たちの経済構造は、イスラムの「東風」によって打破される。

あなたの漕ぎ手たちは、あなたを大海原へと漕ぎ出した。東風が海のただ中であなたを打ち砕いた。あなたの富、あなたの市、あなたの商品、あなたの船員、あなたの操舵手、あなたの目止めをする者たち、あなたの商品を扱う者たち、そしてあなたのうちにいるすべての戦士たちと、あなたのただ中にあるすべての仲間たちは、あなたの滅びの日に、海のただ中に沈む。エゼキエル書 27:26、27。

イスラム教の「東風」は、「彼らの破滅の日」に十人の王国を打ち砕く。これは、アレクサンドロス大王の王国が「打ち砕かれ」、四方の風に分け与えられたことによって表されている。ダニエル書十一章で記された多くの歴史は、同章が最終的成就に至るにつれて繰り返されるだろう。それらの歴史をどこで正しく区切るべきかを見極めることは、預言の学徒として召された者たちに託された預言的な務めである。ダニエル書十一章の最後の六節は、ミカエルが立ち上がる時、すなわち人類の猶予期間の終わりに結末を迎える。アレクサンドロス大王の王国が四方の風に分割されることは、猶予期間の終わりを表し

ており、続く五節以降の預言的歴史が新たな預言の系列として扱われるべきことを示している。

第5節から第16節までは、538年から間もなく到来する日曜法に至る歴史を明らかにしている。第5節から第9節までは、538年に始まり、1798年の終わりの時に終結した、教皇権による千二百六十年の支配の歴史を表している。第10節は、終わりの時である1989年に、教皇権がソビエト連邦を一掃した際の第40節を予表する歴史を示している。第11節と第12節は、現在のウクライナにおける代理戦争を示しており、プーチンとロシアがこれに勝利することになるが、プーチンの勝利の余波は、「ニネベの戦い」および「コスローの没落」に並行することになり、それは第一の災いの歴史においてイスラムを解き放った「底知れぬ穴を開いた鍵」であった。

プーチンの東の間の勝利の余波の中で、合衆国は、第十三節から第十五節において、代理戦争に勝利するであろう。すなわち、それは第二次世界大戦以来継続してきた代理戦争の終結である。この箇所は三つの戦いを示している。第一の戦いは、一九八九年に、第十節および第四十節の成就として終結した。第二の戦いは、現在のウクライナにおける戦争であり、第十一節および第十二節を表している。そして第三の代理戦争、すなわち合衆国の最終的勝利を表すものは、第十三節から第十五節に示されている。

第五節から第十五節にわたって示されているこれら四つの期間について認識されるべきことは、現在のウクライナにおける戦争を表す最後の二つの期間、そしてそれに続く合衆国の報復が、封印の時に生起するということである。第十六節は、合衆国において間もなく到来する日曜法を明示している。第五節から第十節までは、538年から1798年の終わりの時に至る歴史、そしてさらに1989年の終わりの時に至る歴史を表している。したがって、第十一節から第十五節に表されている最終的な代理戦争の二つの戦いは、エゼキエル書第十二章が、すべての幻の効力が成就すると示している期間において成就するのである。

それらの幻はエゼキエルに「車輪の中の車輪」として示され、シスター・ホワイトはそれを「人間の出来事の複雑な相互作用」と説明している。ウクライナでの戦争の歴史、プーチンの勝利、続く彼の失脚、そしてそれに続くアメリカ合衆国の勝利は、神の御言葉における「行に行」の啓示の中でも最も複雑なものの一つである。

エゼキエルの「輪の中に輪」について、シスター・ホワイトは、エゼキエルが最初にそれらの車輪を見たときには混沌として見えたが、やがてその車輪の中に完全な秩序を認め、それらは「人間の出来事の複雑な相互作用」であると述べている。十一節から十五節に示された歴史を正しく区分するためには、カトリック教会とナチス・ドイツの関係を理解しなければならない。というのも、ウクライナにおけるナチスの指導者たちは、その関係の代理人だからである。

また、1918年にポルトガルのファティマで起きたいわゆる聖母マリアの出現の役割を、当時の出来事に関わった三人の子どもたちにいわゆる聖母マリアが残した三つの秘密も含めて、理解することが必要である。カトリック教会と無神論的なロシアとの闘争や第二次世界大戦を描くそれら三つのメッセージの前提は、ウクライナでの戦争に表れているファティマのメッセージの一部である。

フランス革命、そしてそれがカトリック教会と持つ預言的關係、さらには最終的にプーチンを表象するナポレオン・ボナパルトとの關係もまた、ウクライナにおける戦争の中に表されている「車輪」の一つである。フランス革命が合衆国と持つ預言的關係もまた、その歴史の中に表されている。というのは、フランスが没落しつつあったときにナポレオンによってプーチンが表象されていると同様に、1989年の戦いにおいてカトリック主義の軍勢の長であった元俳優ロナルド・レーガンは、ウクライナが没落しつつあるときの元俳優ゼレンスキーを予型しているからである。これらの節において交差し結び合う車輪の中で、ゼレンスキーを推進してきた、また推進している合衆国の民主党の政治家たちにとっての最後の一撃は、プーチンが勝利するときには彼によって暴かれることになる。

次回の記事でこの研究を続けます。

ケバル川のほとりで、エゼキエルは北の方から来るかのようなつむじ風を見た。「大きな雲、そして自らを包み込む火があり、そのまわりには輝きがあり、その中からは琥珀のような色が現れていた。」いくつもの車輪が互いに交差し、四つの生き物によって動かされていた。これらすべてのはるか上には「サファイアの石のような外観の御座のかたちがあり、その御座のかたちの上には、人の姿のようなものがあった。」また、「ケルブたちには、その翼の下に人の手の形が見えた。」エゼキエル 1:4, 26; 10:8. 車輪は配置があまりに複雑で、ひと目には混乱しているように見えたが、完全な調和のうちに動いていた。ケルブの翼の下にあるその手に支えられ導かれた天上の存在たちが、これらの車輪を推し進めていた。その上、サファイアの御座には永遠の御方がおられ、御座のまわりには神のあわれみのしるしである虹があった。

車輪のように複雑なものがケルビムの翼の下にある手の導きに従っていたように、人間の出来事の複雑な推移もまた神の統御のもとにある。諸国の争いと騒乱のただ中であっても、ケルビムの上に座しておられる方は、いまなお地上の事柄を導いておられる。

それぞれに割り当てられた時と場所を次々に占め、自らはその意味を知らぬままその真理の証しとなってきた諸国の歴史は、私たちに語りかけている。今日のすべての国々とすべての個人に、神はご自身の大いなる計画の中でそれぞれの位置を定めておられる。過ちのない方の御手にある測り縄によって、今日、人々も国々も量られている。すべての者は自らの選択によって自らの運命を定めており、神はご自身の目的を成就するために、すべてを御旨のもとに治めておられる。

「永遠の昔から永遠の未来に至るまで、預言という鎖の輪を一つまた一つと結び合わせつつ、大いなる I AM がその御言葉のうちに定めてこられた歴史は、時代の行進の中で今日の私たちがどこにいるのか、またこれからの時に何が起こり得るのかを教えている。現在に至るまで、成就するとして預言されてきたすべては、歴史のページに記されてきたのであり、なおこれから起こるすべてのことも、定められた順序に従って必ず成就することを私たちは確信してよい。」 Education, 178.